2022年3月20日　受難節第3主日礼拝

メッセージ「私を救うもの」　　牛田匡牧師

聖書　マルコによる福音書　8章27−37節

今回の聖書のお話は、聖書協会共同訳聖書では前後 2 つに分けられていて、「ペトロ、イエスがメシアであると告白する」という小見出しと、「イエス、死と復活を予告する」という小見出しがつけられているお話でした。今は、イエス様が十字架に架けられていく受難に、段々と向かって歩みを進めていく受難節の季節なので、このようなお話が聖書日課で定められています。

イエス様は「一体何者なのか、何を目指して弟子たちや各地の人々と一緒に歩まれていたのか」。そのことについて、人々は疑問に思い、ヘブライ語聖書に記され、人々の間に記憶されている預言者の再来だとか、様々に考えられていたということが分かります。その中で弟子のペトロは、イエス様のことを「あなたはメシアです」と言いました。「メシア」というのは、「救い主」と訳されることの多いヘブライ語ですが、元々は「油を注がれた者」という意味で、古代イスラエル王国で王様が就任する際に油を注がれていたことから、正しい治世をもって国を治める王、救い主を表わす言葉になりました。この「メシア」のギリシア語訳が「キリスト」です。

イエス様は人々から正しく理解されない中、時の権力者たちからは邪魔者と見なされて、排除されていきましたが、そのような中でもペトロだけはイエス様のことを正しく理解していた……。前半のお話を読むと、そのようなことが書いてあるように読めてしまいます。しかし、このお話は歴史の中を生きられたイエス様の実際の言葉と行動というよりは、むしろイエス様の死と復活の後、最初期の教会、キリスト教共同体が自分たちのために創作して語り継ぎ、それがやがて福音書として書き記されたお話なのだろうと考えられています。

31 節以降の後半も同様です。イエス様は十字架に架けられるまで、ここから始まって 3 回も自分が捕らえられて、苦しみを受けて殺され、3 日目に復活するということを、予告したと記されています。そのような書き方はこの「マルコ福音書」だけではなく、「マタイ福音書」でも「ルカ福音書」でも同様です。紀元 1 世紀頃、全人口の 95%以上、ほとんどの人が文字の読み書きができない中で、人々はヘブ

ライ語聖書に記されている数々の物語を、耳で聞いて理解して覚えていました。現代でも文字を覚える前の小さな子どもたちが、絵本や紙芝居の読み聞かせや、昔話を、耳で聞いて覚えて理解するのと同じです。

そのような時代の中で、イエス様が「自分の死と復活を 3 回も予告する」というお話は、それを聞いた人々に、とても印象的に響いたのではないかと想像しますし、そのために福音書の著者たちは、わざわざ３回も繰り返して、書いたのだろうと思います。しかし、本当のイエス様は、そうではありませんでした。未来に起こることを予見予知できるような魔法使いや超能力者ではなく、これから起こるかもしれないことに怯え、弟子たちに裏切られたことにガッカリし、最後は十字架の上で神に向かって絶望の言葉を出すような、私たちと同じ生身の人間でした。

イエス様に限らず、正しい人ほど権力者たちから睨まれて迫害される、というのは、いつの時代でもどこの国でも起こることではないかと思います。古代ギリシャ・ローマ世界でも、そのような言い伝えがありましたので、イエス様の死と復活の後、最初期の教会の人々が、そのような考え方に当てはめて、イエス様を理解して、このような物語を書いていったのだろうと考えられています。それこそ 34 節 35 節の言葉、「私の後に従いたい者は、自分を捨て、自分の十字架を負って、私に従いなさい。自分の命を救おうと思う者は、それを失うが、私のため、また福音のために自分の命を失う者は、それを救うのである」は、イエス様の十字架を経験した後の教会が、「イエス様のように私たちも皆、十字架を負って、苦難の道を歩むのだ、それこそ救いの道なのである」と言って書き記した言葉であることが明らかです。

社会の中からのけ者にされ、持っているものまで取り上げられて、日々の食事に食うや食わずでいたような人々の間に、イエス様は共におられました。そのような人々に対して、本当にイエス様は「自分を捨て、私に従いなさい。自分の命を救おうと思う者は、それを失うが、私のために自分の命を失う者は、それを救うのである」という言葉を、言われたのでしょうか。それこそ、傷口に塩を塗り込むような言葉です。むしろ、このお話の中で実際のイエス様の言葉として考えられるのは、36 節 37 節の言葉「人が全世界を手に入れても、自分の命（自分自身）を損なうなら、何の得があろうか。人はどんな代価を払って、その命を買い戻すことができようか」の方でしょう。何か大きいもののための自己犠牲や自己否定ではなく、どんなに小さくされている命にも、命それ自体にかけがえのない尊厳があること、絶対

の価値があることを、イエス様は伝え、そのために共に生きる道を示されたのではないでしょうか。

ペトロはイエス様に「あなたがたは私を何者だというのか」と問われて、「あなたはメシア（救い主）です」と答えました。ですが、ふと考えてみると、「救い」とは一体何なのでしょうか。教会では「救い」や「救い主」という言葉は、よく聞きますが、その他の日常生活の中ではあまり使わないのではないかとも思います。日本語の語源を調べてみると、「金魚掬(すく)い」のように泳いでいたり、おぼれていたりするものを、水の中から「掬(すく)い取る」ということや、また外からの力によって、危機的な状況から「助け上げる」際の「たすく」が「すくふ」になったと考えられているようです。

では、私たちが今、直面している危機的状況とは一体何でしょうか。世界中には様々な問題があります。新型コロナウイルスという病気もそうです。経済格差も地球環境破壊もそうです。核兵器や原子力発電所もそうです。そして先月末から続いているロシアのウクライナ侵攻もそうでしょう。4週間以上が経ち、事態はどんどん悪化しています。昨日にはロシアからミサイルが撃ち込まれたとも報じられていました。被害は拡大し続けています。

「どうして戦争があるのでしょうか」「戦争をして誰が得になるのでしょうか」「戦争をすると儲かる人がいるのでしょうか」……。短期的に見れば、どこかの誰かが儲かることはあったとしても、長期的に見れば「戦争で得をすることはない」ということは、歴史を見ればすぐに分かることだと思います。20 世紀の戦争では、多くの人々の命が失われ、いくつもの町も文化財も失われ、それらは二度と取り返しのつかない大きな損失です。にもかかわらず、今も戦争は止まず、破壊が止んでいません。それらが無くならない一番の理由は、やはり多くの人々が「魂の奥深くで傷ついているから」なのではないでしょうか。誰でも他人から大切にされたら、安心して自分も他人を大切にしようと思うのではないかと思いますが、逆に他人から虐待されたり、いじめられたりしたら、もう人も自分もどうでもよくなって、投げやりになったり、破壊的になったりしてしまうものではないでしょうか。

ナチス・ドイツのヒトラーも、当時の社会状況や時代背景の中で、幼少期からひどい虐待を受けたせいで、あれだけ差別的で破壊的になったと考えられています。また「何もかも、もうどうでもよかった」「誰でもよかった」と言って、通り魔殺傷事件を起こす人たちも、その経歴や成育歴を遡ってみた時に、幼い頃にもし本当に

心許せる友人や、彼のことを認めてくれる大人と出会っていたら、ずいぶんと違っていたのではないかと思うことがあります。結局のところ、私たち一人一人の命、魂や自分自身の一番奥底にあって、この世界を一番根底で支えているのは、世間的な富とか、肩書きなどではなく、むしろ愛情とか友情とか、信頼とか、それこそお金では買えないようなものなのではないかと思いますが、いかがでしょうか。

今、ウクライナでは鉄砲を持ったロシアの兵隊を前に、武器を持たないウクライナの一般市民たちが「戦争をやめて」と言って非暴力のデモをしています。いつ発砲されて殺されるかもしれません。しかし、ロシアの兵士にとっても、武器をもって自分を襲ってくる相手を攻撃することはできても、武器を持たない一般市民を一方的に攻撃するのは、やりにくいことなのでしょう。多くの戦争があり「戦争の世紀」と呼ばれた 20 世紀に、人類の発展のために寄与したのは、インドのガンジーや、アメリカのマルチン・ルーサー・キング、南アフリカのネルソン・マンデラなど、みな武力に対して非暴力で抵抗したリーダーたちでした。武力に対して暴力で応じるのではなく、暴力に対して非暴力で抵抗する……。イエス様は「剣を取る者は皆、剣で滅びる」（マタイ 26：52）と言われました。そしてご自身は、暴力に対して暴力で返さず、むしろその暴力の餌食となって、十字架で殺されていきましたが、その精神は以降 2000 年以上に亘って、今もなお生きて世界中に引き継がれ、多くの所で影響を与えてきています。

どうしたら、戦争がなくなるのか。それは国家対国家という政治の問題というだけではなく、一人一人の心、魂、自分自身の存在の問題という所からスタートするしかなく、一人一人が平和を創り出す人になることが重要なのだと思います。「私を救う者」……イエス・キリストが示した「救い」とは何でしょうか。軍事力に対して、より強大な軍事力で応戦して相手を撃退できたとしても、そこには「平和」も「救い」もありません。恨みや憎しみの連鎖がその後も何世代にも続いていきます。本当の「救い」とは、他者を信頼できず疑心暗鬼になってしまう自分や、他者を恐れ暴力をふるわれる前に暴力をふるってしまおうとする自分、真実の命を生きられていない自分自身からの解放なのではないかと思います。

イエス様が言われたように、自分自身も人も大切にすることを通して、私たちは今日も身近な所から小さな平和を創り出すことを通して、この世界に働きかけていきます。